ぬらりくらりと 要領を得ず

川崎造船職工と松方社長の會見

昨年川崎造船所の勞働者が職工代表として職首七名が廿日午後松方社長と會見した事は夕刊に掲載した——當局委員は先づ社長の

歸朝

を祝し『職首職工三千人の代表として參りました』と、留守重役の懇願を語つた『君は三千人と云ふが、會社の帳簿に據ると、五百卅一名しかないよ』と社長が極めつける、青柳委員は屈せず、委員は職首者の交渉を妨げられた爲め同盟職工となつたのである……第二回の職首者は第一回よりの手當を支給された、

少額

これは社長の責任でないと云はれるが』と突っ込む、松方社長は相恰を崩して笑ひながら『少し詭りとは思つてゐないね』と軟く受流す、職工は『社長は工場家中の先輩者ですからナ』と嫌て『よもや要求條件が

不當

とは思はれますまい』と迫る、押問答の末、社長は『實情は知つてゐる、逃げも隱れもせぬ、然と話さうぢやないか、今日半日位の賃銀は拵に振つてくれ、本當に今度は悪い事を行つてくれたね』と歐洲の例を引いて、工場委員制度は世に滑稽の

面白

くないよと、要求は忘れたやうに、けろりとして、責任は全部他にあるのだと幾度も繰返した、職工側は聞へかねて、我々の要求條件に就て是か非かと

最後

の返答を迫る『工場委員制度は面白くないから態と考へて見よう、賃銀値上は私の主義として職首ぬ方針だから、出來るだけ良くするよ』社長の返辭は曖昧である『どうも有難う、子供の樣なお能遠慮